

多面的・多角的思考力を 育成する道徳授業

国立教育政策研究所
西野真由美

道徳科の目標

「道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習を通して」

- 学習活動としての「多面的・多角的思考」
 - × 目標に到達する手段・道具
 - 学習活動の実現が目標に通じるプロセス
 - ⇒ 価値の学習を道徳性へつなぐ道徳的実践
- ⇒ 多面的・多角的思考を授業でどう育むか

子供の授業への意識の成長

学年	「道徳の時間」に関する自由記述から	キーワード
小3	<ul style="list-style-type: none"> お話が楽しかった いいなあと思うお話がたくさんあった 	心情と結びついた記憶
小4	<ul style="list-style-type: none"> 生き物を大事にしなければと思った 学習してから「あ、今友だちが困っている」と考えるようになった 仲間はずれは悪いことだと思えるようになった 	生活を振り返る力と実践意欲の高まり
小5/6	<ul style="list-style-type: none"> 地域のボランティアについてもっと学習してみたい みんなで話し合っってテーマを決めたい 本やビデオ以外のものもやってみたい 自分やみんなの意見を参考に話し合いたい 	学習内容や活動への具体的な願い
中学生	<ul style="list-style-type: none"> 自分の意見や相手の意見を聞いたり話したりすることで、また新たな考えを生み出せて人とのつきあい方にも役立っている。 学習したことについて感想を書くだけではつまらない。クラス討論がやりたい。でもいきなりクラス全体で話し合うと意見が出にくいから、はじめは4～6人の仲のよい人同士で意見交換して、それからクラスでと、少しずつ広げていった方がよい。 	異なる意見・多様な意見に出会う意義を実感

大学生が考える道徳授業の課題と改善

- 決まりきった答えを押し付けられているように感じる
⇒先生が答えを用意するのではなく、話し合いで出たものを答えとする。先生は調整役に徹する。
⇒現実のリアリティのある話を
- 授業の目的がはっきりしていない
身に付けてほしいのか、考えてほしいのか
⇒目的に合わせた授業(色々な意見が出る答えのないテーマ)
⇒隔週で両方の性質の授業を実施
⇒「常識的なこと」に揺さぶりをかけ、徳目を自分で考えるきっかけを作る
- 内容がつまらない・発展的でない(全学年同じような学習)
⇒現実社会の問題を自分で考えさせる発展的な授業
⇒日常生活では深く考えないようなタブーに視点をあてる

これまでの学習観・子供観

「そうすると、これは教師の指導性よりも、生徒自らが問題を発見したり、生徒みずからが問題解決の手がかりを得るように仕向けていくそういう時間だ。ところがもう一方では、道徳的な知識というのは、生徒は自分に身につけていないとすれば、これはどうしても教師側が指導性を持って、わかっちゃいるけれども、ほんとうによいことを教えなければならない。」

(間瀬正次, 雑誌『道徳教育』 No.64, 1966)

教育方法(学び)の質的転換とは

- **学習観の転換 「人はいかに学ぶか」**
環境との相互交渉(文脈)の中で既存の経験を生かしつつ
出会った問題に対処しようとする問題解決的な学習モデル
→学び手にとって**切実な課題設定**の重要性
- **問題解決学習の捉え直し**
多様な意見や考えを持つ他者と協同で問題を解決しようとする学習で、**新たな価値や考えを発見・創造する**可能性
- **螺旋(サイクル)型の問題解決プロセス**
→解決の先に**新たな「問い」**が生まれる授業づくりが必要
- **コミュニケーション自体の道徳的価値**
合意を求めてなされる実践的な討議自体が価値を育む

子供の学ぶ力を引き出す授業設計

- 子供は生活の中で価値に関わる様々な状況を体験している
- その体験を道徳的問題として再構成
- 異なる意見に出会いながら問題状況を解決しようとする話し合いの中で、価値への気づき・思考の深まりがある
- 解決(結論)の一致よりも、解決を求めて共に考え、議論・探求するプロセスの体験が重要

多面的・多角的思考を促す問い

- 中心となる問い
 - 原理
「思いやりとは何か」「～とどう違うのか」
 - 根拠
「なぜ思いやりは大切なのだろうか」
 - 適用
「どうすれば思いやりを表現できるか？」
- 実践につながる”How”（方法知）の探求
 - 「適用」への問いは、原理や根拠への思考を深める
⇒ “How”は単なるスキルや表現の問題ではない
→ 価値と実践をつなぐ**実践力**を育む問い

授業づくりの具体的視点

- 事例1 心情だけで実践力が育つか
 - ―「絵はがきと切手」(小学校中学年)の指導案から
- 事例2 「なぜ思いが伝えられないか」を考える
 - ―鹿児島市立伊敷台小学校「こころの時間」(小3)
- 事例3 学習活動の意味を価値の視点で見直す
 - ―香川大学教育学部附属高松小学校「創造活動」(異学年学級)
- 事例4 「正義を主張するにはどうしたらよいか？」
 - ―教師用指導ビデオ(東京書籍)に基づく授業記録(中学校)

事例3 学習活動の振り返りから「問い」を共有し、活動を価値の視点で見直す

活動名：「マナーアップ大作成」

前時までの活動：「電車内でのマナーアップ」に取り組む中で、公共交通機関の方の話を聞き、「一日駅長」をやろうというアイデアが出てきた。

事前の調査：ほぼ全員が「やってみたい」と意欲を示した。
教師は、一人だけ「**一日駅長って意味があるのか**」と書いた子供の意見に注目

本時：「一日駅長をやろう」というアイデアで皆が盛り上がる中で...
教師「やりたい人が多いね。だけどね、一日駅長をやるのに反対の人がいるよ。
Aさん、なんで反対なのかみんなに聞かせてくれる？」
Aさん「一日駅長をやっても、切符を切ったり集めたりするだけだから、
それよりはティッシュを配ったほうがマナーアップにつながると思う。」

↓
「一日駅長はマナーアップにつながるのか」という問いから
「**マナーアップにつなげるために自分たちにできることは何か**」という問いへ

↓
本時の最後では、「一日駅長をやりたい」と挙手した子供は6名。
「もっと効果的なマナーアップの作戦を考えよう」という結論となった。

事例4 異なる見方や考え方を出し合いながら、協働でよりよい方法を考える

資料：正義ってなに？（東京書籍 「中学道徳1 明日をひらく」）

主題：正義を求めて

ねらい：正義は、人間としての正しい在り方、正しい筋道を示していることを理解し、その実現に努める意欲を高める。

問：正義ってなに？

- 「弱い人を助ける？」
- 「正しいこと？」

物語について：

問：キャロル、ルーシー それぞれの「正義」の定義はなんだろう？

みんなの意見：

キャロル： - クラスで対立をかきこい
- ストーズに物事を進めるために自分がいける

ルーシー： - 自分が正しいと思うことが正義
- 一人じゃなくみんなで決めるべき

問：どちらの正義が正しいのだろう？

キャロルが正しい： - キャロルはみんなにあたるようにしている
- 一人が決めれば対立が起らない

ルーシーが正しい： - みんなのやりたいことをやらせようとしている
- みんなの意見も聞くとしている

**問：ルーシーの行為に問題はないのか？
自分の正義を主張したり聞くにはどうしたらいいだろう？**

- 新しい正義をつくる
- 相手の方法を認める
- 交替で互いの方法をとる
- 両者のことをわがっている
- 第三者（エコー）~~に~~に任せる

正義ってなに？

子供の学びを評価する

- 「思考・判断・表現」に関するエピソードを蓄積
 - 過去の体験を振り返って考えている
 - 自分と違う意見や立場を理解しようとしている
 - 別の視点で考えてみようとしている
 - 行為の結果や影響について考えようとしている
- 発言や記述の背後にある子供の思いや変容を**多くの目**で読み取る
- 子供自身に授業での「話し合いを評価させる
 - 一致や合意形成だけでなく、「不一致」も成果
 - ⇒ 相互理解や異なる意見からの気づきを評価